

2022.11.27 労働者協同組合法周知フォーラム

「変革は、弱いところ、小さいところ、
遠いところから一協同労働の可能性」

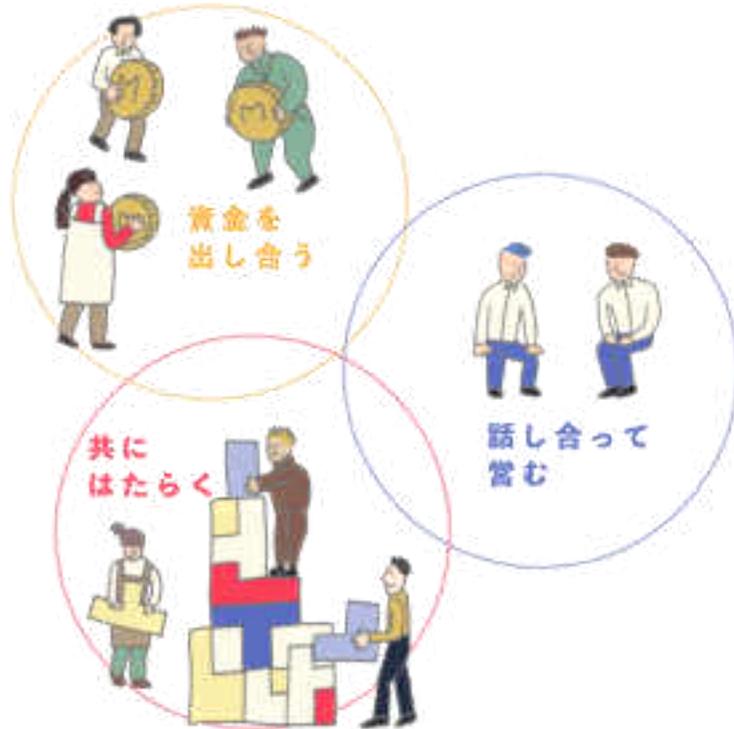
浦河べてるの家/北海道医療大学
向谷地 生良

「運動」から「協同」へ

- **要求運動の時代**（1960年代から70年代）医療・保健・福祉・環境・労働などの生活に密着した問題を制度・政策の変更や創設を通じて解決を目指すさまざまな住民運動、患者運動、障害者運動、市民運動・労働運動が盛んだった時代
- **運動の担い手からサービスの担い手へ**（1980年代から2000年代）社会運動を推進した市民や当事者が、サービスや問題解決の担い手とになっていく時代—構造改革の模索、少子高齢化社会を迎え、さまざまな制度改革（社会福祉基礎構造改革、児童・高齢・精神保健医療福祉・障害などの分野における改革ビジョン、災害を通じた防災意識の高まり、働き方改革など）と、それに伴う新たな課題の顕在化
- **市民主導・当事者主導による協同の時代へ**—地域住民の暮らしに関わる身近なニーズの充足と改善に向けた行政・関係機関・関連事業所・利用者・市民の連携と協同—課題を見出した市民・当事者が、同時に活動・事業を通じて課題解決の担い手となり、それらの経験が制度政策の改善や創出にも活かされる

○協同労働の三つの特徴

1. 出資（思）をする一身近な地域の課題の解消に向けて「出資」と「出”思”」を行う/こころを合わせて、力をあわせて、助け合って働くの実現
2. 話し合って営む（対話重視）＝地域の身近な課題、困りごとを、ともに対話を重ねながら働くことで解消する
3. 共にはたらくー「助け合い」の働き方＝働くこと、暮らすこと、生きることを一つの事として大切にし、助け合って働く

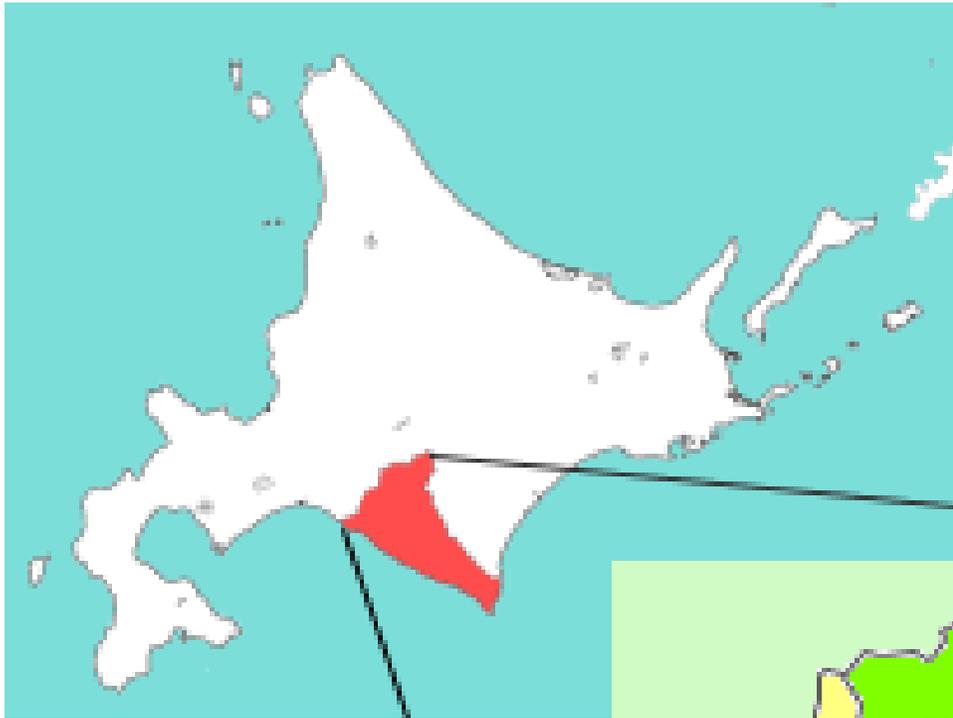


厚労省HPより

協同労働のはじまり

- 協同組合の歴史は、19世紀のイギリスにさかのぼる。
- 当時のイギリスは、産業革命（蒸気機関、機械を導入した大量生産などによる産業構造の変化）が起こり、生産が飛躍的に増大した一方で、工場で働く人々は低賃金・長時間労働を強いられ、常に失業の不安にさらされていた。
- 1844年、イギリスの工業都市マンチェスターの北東にあるロッチデールという町で、織物工など28人の労働者が、1年がかりで1人1ポンドを積み立て、「ロッチデール公正開拓者組合」を設立。
- 同年12月、倉庫の1階に小麦粉、バター、砂糖、オートミールを商品とする最初の店を開いた。（日本生活協同組合連合会HP参照）

べてるにおける協同の歩み



(20220901 現在)

新ひだか	21,517人
浦河	11,700人
様似	4,043人
えりも	4,335人

浦河赤十字病院精神科病棟(1959-2014)
精神科への入退院の経験をした人たちが活動の担い手となった



精神医学＝“困”学(「困い込み」の医学)

看護＝“管”護(「管理」の看護)

福祉＝“服”祉(「服従」の福祉)

べてるの家の歩みは精神障害（統合失調症）を体験した一人の退院（名誉理事長 佐々木実氏）からはじまった



「めざしたものはただ一つ、どのような病気や障害を持った人でも、人として尊重され、一人の町民として地域に役割を持ち、暮らせること」1978年7月、退院祝い

三つの「死」

「こころの病」を恥じること、働く場を失うこと—社会死

「家族の中で居場所を失うこと」—家族死

「孤立、孤独に陥ることによって肉体的に弱ること」—肉体死



「働くこと」を通じて、人と地域の回復をうながす

昆布で起業 「潔さん、一緒に金儲けしないか」

社会復帰から「社会進出」へ
作業から「起業」へ
安心してサボれる会社づくり



北海道精神衛生白書

北海道

二 精神障害による損失

かように甚大な数の精神障害者によるところの経済的その他の損失が如何に莫大なるものであるかを述べて見よう。

精神障害者の犯罪については、放火、殺人犯のうち少くとも初犯者の一〇％、累犯者の八〇％が精神障害者と見込まれており、
領、強盗による被害もあり、又精神障害者中、精神病者の八〇％及び精神薄弱者のうち高度なる白痴、痴愚にあたる者は生産離
れ、このための保護にあたる家族の生産離脱をも加えるとき、根拠ある推計若しくは豫想のこれらの経済的損害、生産の阻害によ
る、その額は極めて甚大なる数となつて表われてくる。

経済的損害

放火殺人による被害 (イ)	區分		損失推計年額	備考
	北海道	全 國		
	143,000 千圓	2,600,000 千圓		

精神障害者は、犯罪者予備軍、社会に損害を与える“非生産的存在”と見なされ、昭和29年の全国精神障害者実態調査によつて、「治安維持」のために35万床の病床が必要とされ、国庫補助により全国に精神病院が開設された。

ナチスのポスター

「この立派な人間が、こんな、我々の社会を脅かす病んだ人間の世話に専念している。我々はこの図を恥ずべきではないのか？」

※ ナチス・ドイツ社会では遺伝性疾患をもつ人がいかに「民族共同体」に負担をかけているか、意味もなく国民の大事なお金を使う存在であるかが強調された。

「人生ここにあり！」

(ジュリオ・マンフレドニア監督＝2008年、イタリア、111分)

イタリアにおける精神医療改革(バザーリア改革)の受け皿になった労働者協同組合の実話が映画化されています。

1983年のイタリアのミラノが舞台で、ひとりの正義感にあふれる主人公(ネッコ)が、精神医療改革で廃止となった精神病院を退院してきた元患者たちで構成された労働者協同組合で働くことになり、やる気を持ってない元患者たちと、自ら稼ぐことでやる気を取り戻してもらおうと、建築現場の「床貼り」を請け負う事業を立ち上げるところからはじまるエピソードが感動的に描かれています。

(参考 <https://eiga.com/movie/55944/>)

こころの病ー「苦悩の最大化」

- 「人間が全て悩めるものとしてあるなら、そして病がその現れとするならば、社会の中で自己の悩みを解決してゆくのが自然ではないか、そのために病者を含めた社会が互いの信頼の輪を作る以外に方法はないのではないか……」



(バザーリア)

- 「苦悩の最大化」から「生きやすさの最大化」へ

べてるにおける働くこと

- 働くことが、地域の課題を解決したり、地域の活性化につながる
- 働くことを通じて、考えること、相談すること、工夫すること、話し合うこと、受けいれること、折り合うこと、伝えること、自分を知ること、許すこと、の経験を重ね、生き方、暮らし方として仕事をする
- 「利益の無いところを大切に」をモットーに、事業の運営に対して、一人一人が責任と役割を持ち、苦労を分かち合いながら推進する
- 仕事を通じておきる苦労を、みんなの苦労として分かち合い、研究を重ねながら、自分らしい働く環境づくりに努める
- 以上の成果を「べてるの働き方」として発信する



佐々木実氏が代表取締役、理事長に就任

会社の設立に不安を覚え、反対の意見が多い中で

「病気の経験をした自分達だからできる会社がある気がする。介護用品の店、福祉の店にしたい・・・」

という一人のメンバーの声で、共同出資、共同経営の会社「福祉ショップべてる」を設立(1993)、2002年に社会福祉法人(就労支援・生活支援)を設立。

地域の課題を事業化

- 日高昆布の販路拡大
- 退院後の居住環境の整備
- 働く場の創出
- 子育て支援、家族支援
- 空き店舗、住宅の活用
- 地域の農家との連携
- 地域ケアの推進



全国各地への講演と昆布等の対面販売、
「昆布も売るけど、自分も売る！」



どんな時でも、どんなことでも、合言葉は「一緒に研究しよう！」



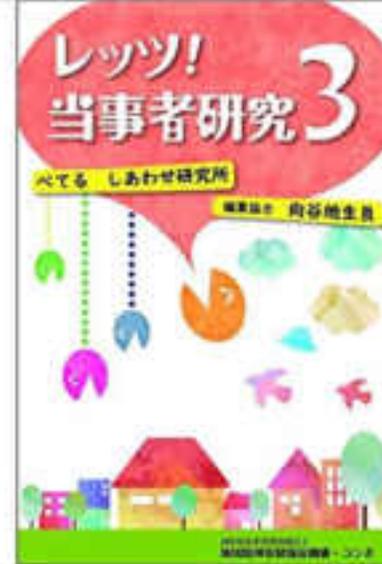
さまざまな商品開発



いちご農家との連携、製品づくりに向けた協同



経験の発信－「当事者研究」シリーズ



05年度、06年度東京新聞企画「識者25人が選ぶ“今年の三冊”」に二年連続ノミネート！

空き店舗(書店)の活用/カフェとグループ・ホーム



介護用品の
レンタル・
販売



生協の清掃



ゴミ回収



地域の清掃、草刈り



地域を巻き込んだ田んぼづくり

地域との連携と協同一地域の困りごと、課題を仕事化する



浦河フレンド森の幼稚園
敷地管理、森の活用、教育・研修協力



馬糞（完熟）堆肥の有効活用

べてるが大切にしてきた協同の理念

「安全」から「安心」へ

- べてるの歴史は、常に「問題の歴史」であり、一つの苦勞をきっかけに、新しい出会いと知恵を重ねて歩んできました。
- 大切にしてきたことは、人に管理、保護された「安全」ではなく、苦勞を重ねながら、みんなと一緒に創り出していく「安心」の暮らしです。

経験を社会に発信すること

- 私たちは、いままでの経験から、「病気や障害」の体験には、生きること、家族、地域や社会のあり方に関する“大切な知恵”が眠っていると考えています。
- ですから、べてるは、その経験をさまざまな形で地域社会に発信してきました。
- 当事者研究も、その中から生まれた実践知です。

安心して働ける“職場づくり”をめざすこと

- べてるの歩みは、起業の歩みでもあります。
- なぜ、起業をしたのか。
- それは、人に支配、管理された安全や安心ではなく、そこに「本物の生きる苦労」があるからです。
- 起業とは、「お金」を集め、「人」を動かし、新たに「仕事」と「お金」を生み出すことで、人と社会を豊かにする活動です。
- お金が集まるところに、苦労も集まり、「こころの病」は、“人と人との関係の苦労”の中に起きてきます。
- 私たちは、その苦労の中で、自ら“安心して働ける職場づくり”を創り出すという実践に取り組んできました。

働く人達が主役

- べてるは「一人一起業」の精神を大切に歩んできました。
- それは、「人に雇われる」働き方ではなく、一人一人が事業の担い手として、主体的に運営に参加し、責任を分かち合う仕組みをつくるということです。
- べてるは「こころをあわせて、力をあわせて、助け合って働く」しくみづくりに挑戦し続けています。
- そのためにも、事業の運営に積極的に参加し、責任と役割を持つことを大切にしています

人づくり、地域づくりへの貢献

- べてるは、「過疎も捨てたもんじゃない」「地域のために」をモットーに歩んできました。
- 障害や病気を経験した人たちこそ、大切な地域社会の担い手、必要な人材として活かされ、それが地域の活性化につながるという循環を目指しています。
- 日高昆布の産直、べてる祭り、当事者研究、防災活動、国際交流を通じてそれを続けています。

まとめー労働者協同組合法の可能性

- 身近な「困りごと」と「困りごとをかかえた人」は、地域に内在化した見えざる生きにくさ、課題を知らせてくれる大切なメッセージであり、メッセンジャーである。
- その課題を、その課題を見出した人や課題の当事者が一緒になって解決、解消するプロセス（組織・人・仕事・ネットワークづくり）は、地域自体を元気にし、自律的に新たな課題へと向き合う原動力になる。
- 以上、労働者協同組合法は、さまざまな経験を持つ市民が、自ら地域の課題を、働くことを通じて解消することをめざす協同労働の理念を具現化し、それを推進する制度的、社会的な環境を整えるものである。